令和６年度　京都府立西舞鶴高等学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（全日制）　（実施段階）

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
「究理 尚志 敬人」の校訓と「努力と友情」の西高精神を教育の柱に据え、めまぐるしく変化していく社会において、変化を前向きにとらえて主体的に行動し、よりよい社会と幸福な人生を創り出せる人を育てる。 「究理」真理を求め勉学に努める 「尚志」高い理想を抱きその実現に努める 「敬人」人を敬愛し誠実に生きる	(1)　「総合的な探究の時間」では生徒の主体性やSDGsの視点で提言できる力を育てる実践を行い、一定の成果が見られた。また、舞鶴市や市内企業・高等教育機関等との外部との連携を進めて充実した活動ができ、生徒が地域の一員としての自覚を持つ一助とできた。公開授業や授業アンケートを実施したり、評価についての分析などに取組、組織的に授業改善に係る研究を進めた。今後はさらに外部機関との連携を進め、主体的、対話的で深い学びをさらに充実させていく。「地域に開かれた学校づくり」をさらに推進するための取組を進め、本校の魅力を伝えて中学生から選ばれる学校づくりを行う。 (2)　進路指導部と学年部が連携し、各生徒の実態に応じて適切な支援の手立てについて共通認識を図るなど組織的な指導体制の整備を図り、希望進路に応じた丁寧な指導を進めることができた。難関大学の合格者が増加するなど、一定の成果がみられた。これまでと同様に、進路指導に必要な情報、指導方法を共有し、１年次では学力の定着と文理選択を図り、２年次では具体的な希望進路を確立させることを大切にしていく。学校推薦型選抜・総合型選抜においては、総合的な探究の時間の内容と進路希望とリンクさせてテーマ設定をするなど進路実現につなげたい。 (3)　部活動では、地道に努力する生徒と献身的な教職員の支援により、全国大会や近畿大会に出場した生徒もいた。今後も、学業と部活動の両立のための支援を継続していく。また、社会性等を身につけるために学校行事などの特別活動においても積極的な活動を行うとともに、成人年齢の引き下げに伴い、主権者教育を充実していく。 (4)　生徒会を中心に学校行事の計画を進め、ポストコロナの新たな形で実施することができた。保健部と学年部との連携によりSCやSSWとの共通理解のもとで生徒の支援を積極的に進めた。また、特別支援が必要な生徒に対する進路指導・受験指導を担任と連携して行った。挨拶の励行、ボランティア活動の活性化、人権意識の向上、学校生活になじめない生徒への手立てやいじめ・体罰の防止には今後も重点的に取り組む必要がある。 (5)　地域社会に貢献し、その期待に応える学校づくりを進めている。ホームページ、西高だより、西高理探だより、新聞広報を通して、中学生や地域の方に本校の教育活動の成果がよくわかるよう情報発信を行った。さらに「地域に開かれた学校づくり」を充実していく必要がある。スマートスクール推進部と各教科の連携により、校内業務のDX化を進め、授業支援や事例共有を行い、ICTを活用した授業研究を進めることができた。さらに校内全体で研修を進めながら情報モラルに関して意識を高めていく。	スクールミッション「理数探究科・普通科を設置する高校として、地域連携や高大連携による探究活動、学習と部活動の両立を充実させることにより、高い学力を身に付け、知・徳・体の調和のとれた人間の形成を目指し、将来の科学技術分野を担う人材を育成する。」に応えるため、以下のことに取り組む。 ●「努力と友情」の精神に則り、自らを律し他者を思いやる気持ちと自分を大切にする気持ちを醸成する（次のような力を育む）。 【理数探究科】 ・国公立大学の理系学部への進学に必要な幅広い学力と探究心 ・科学技術分野での活躍に必要な科学的に探究する力、情報を活用する力、共創する力 ・科学、科学技術の進展が及ぼす影響を社会的、倫理的な側面から考える力 【普通科】 ・四年制大学等への進学に必要な幅広い学力 ・自分の将来を設計し、その実現のために必要な自己管理能力、自己分析力 ・地元舞鶴市など京都府北部地域の発展に貢献する高い意識 ●多様性を理解し、他者と協働して課題解決に向かう姿勢を養う。 【理数探究科】 ・多くの理数系科目、学校設定科目により系統的な学習を進め、生徒の個性を伸長する。 ・探究のサイクルを通して科学的に探究する力を養う。 ・最先端の科学、科学技術に触れることで、広い視野とチャレンジ精神を養う。 【普通科】 ・少人数授業や習熟度別授業を取り入れ、基礎基本を大切にする。 ・文系特進クラスや理系クラスを設置し、きめ細やかな進路指導を行う。 ・地元企業や団体と連携した探究活動を通じて、課題解決能力を養う。 ●勉学だけでなく、部活動、生徒会活動にも励み、希望進路の実現に向けて努力する生徒が志願する学校を目指す。 【理数探究科】 ・数学、理科、探究活動に高い興味・関心を持ち、主体的に学ぶことができる生徒 ・将来、リーダーとして国内外で活躍したいと考えている生徒 【普通科】 ・将来の夢や目標に向かって自らを高めることができる生徒 ・地方創生に関心があり、舞鶴市と連携した活動に取り組む生徒

評価領域	項目（重点目標）	具体的方策	評価		成果と課題
組織・運営	教職員の資質能力を高め、学校全体の教育力の向上を図る。	全教職員が互いに教え合いながら切磋琢磨し、日常的に自己の教科指導力、生徒指導力、業務遂行力を向上させるなど、自立的な人材育成を図るための職場環境作りと研修の場を充実させる。DX研修やセンター研修などの自主的研修受講者が50%以上になるよう、研修の意義を周知し適切な講座受講を推奨する。 分掌部長・教科主任を核に、本校の課題に対する共通理解を深め、新たな提言や知恵を結集させて学校運営・教育活動の一層の活性化を図る。	A	A	【成果】 ・DX研修は全員が受講し、センターでの自主的研修は初任期研修等を除いて計33講座のべ40名が受講することができた。 ・部長会議や教科会議だけでなく普段から情報共有ツールを利用して職員間の共通理解を図ることができた。 ・生徒には、教育活動を通じて地域と連携して探究活動を進め自律した学習者を目指す指導をした。授業や特別活動で努力を重ね、近畿大会出場や表彰を受ける生徒が多くあった。学校評価アンケートでの生徒満足度は88%であった。 ・近隣小中学校との連携を図り、本校を志望する中学生に対して個別相談会を例年より多く実施し、本校の教育活動について理解を深めていただく機会とすることができた。 ・生徒の日頃の活動を頻繁に発信したり、生徒が実際に地域へでかけて活動することで、地域や保護者へ向けて生き生きとした生徒の様子を広く周知することができた。保護者アンケートの「教育活動が見えやすい」項目の回答は90%であった。 ・長年継続し取り組んできた冠島調査についてその成果が認められ、全国野生生物保護活動発表大会において文部科学大臣賞を受賞した。 【課題】 ・ICTを活用した授業の工夫を研究し、さらに生徒の学力向上につながるよう研修を推進する。 ・中学生から選ばれる学校になるため、発信の頻度や発信内容を検討し、さらに在校生の満足度をあげる。 ・保護者との連携を密にし、生徒・保護者から信頼される学校となるよう一層の努力を続ける。
	教育活動を充実させ、生徒の学校生活に対する満足度を高める。	生徒には、一段高い目標を持たせ、自己の変容を実感できるよう指導を行う。そのために、主体的・対話的で深い学びや、探究活動を推進し、学力の向上・進路希望の実現・特別活動の充実を図ることで、生徒の生活の自立と学習の自立を促す。年度末の学校評価アンケートにおいて、生徒の満足度90%を目指し各教育活動に取り組む。 また主権者としての自覚を促すため教科横断的に主権者教育を推進する。地域や高等教育機関との連携をさらに進め、生徒が地域の一員としての意識を持ち自己有用感を高める機会を創造する。 ICTを活用した授業を工夫し効果的な学力向上を目指して研修を推進する。	B		
	学校の取り巻く状況を見据えた学校改革を図る。	学校説明会の内容の充実と小・中学校等地域との連携の強化を進める。中学生から選ばれる魅力ある学校づくりを行う。 個別相談会を早期から設け、中学生や保護者等への理解を深めてもらう機会とする。 本校の教育内容・実践等に関して、ホームページ、西高だより、新聞を使って情報発信し「地域に開かれた学校づくり」を推進する。	A		
	学校を取り巻く危機に対して万全の対策を図る。	学校の安全を様々な危機から守るための校内体制を作るとともに、京都府教育委員会や関係機関と密な連携を図る。保護者への連絡をスピーディに行う。年度末の学校評価アンケート（保護者等）において、「教育活動が見えやすい」の項目が80%以上になるよう保護者等へ日々の活動を広報していく。	A		

評価領域		項目（重点目標）	具体的方策	評価			成果と課題
教務部	校務運営	基礎学力充実に向けた取組	学習環境の整備に努め、時間割変更等にきめ細かく対応し、授業を大切にする学校を目指す。また、個に応じた学習を支援するため、スタディサプリ到達度テストの連動課題配信を年間10回行い、生徒の取組率が80%以上となるよう、学校全体での活用を促していく。	B		B	【成果】 ・公開授業週間を２回実施できた。また、校内だけの取組にとどめず、中学生・在校生保護者等、中学校教員などへの公開日も設定できた。 ・授業アンケートでは教員の授業方法に関する項目では概ね3.5点以上となっており、生徒の期待に応える授業を展開できている。特にICT機器の適切な活用に関する項目では3.9点となっている。 ・５段階評定と観点別評価の関係性に関する分析資料を校内で提示し、新学習指導要領における評価に関する基本理念の共有に資することができた。 【課題】 ・スタディサプリ到達度テスト連動課題は予定通りの回数を配信できたが、取組率は全体で15%程度であった。テスト受験直後は30～40%程度だが回を追うごとに低下している。本当に生徒に必要な取組であるか検討する必要がある。 ・教員の授業・校務におけるICT活用は進んできているが、生徒自身がICT機器を効果的に活用する事例に関しても、より積極的に発信し校内での情報共有を図りたい。
		教科指導力向上	公開授業週間を年間２回実施し、他の教員の授業参観を通じて、お互いの指導力の向上を図る。また、授業アンケートを年間２回実施し、結果をフィードバックして授業改善を図る。	B			
		ICT機器活用能力向上	生徒に対する授業アンケートにおいて、ICT機器の適切な活用に関する項目が3.8点以上（４点満点）を維持できるよう、タブレット端末などのICT機器を生徒・教員双方が活用できる授業を増やしていく。また、公開授業週間以外でも参観しやすい環境を作り、実践例を全体に共有していく。	A			
		主体的に学ぶための評価方法の工夫	新学習指導要領に基づく評価方法について、主体的な学びにつながる評価方法について検討するとともに、指導と評価の一体化を目指すための研修を行う。	B			
生徒指導部	特別活動	主体的な生徒会活動	生徒会本部役員・局員、クラス役員を中心に主体的な生徒会活動を通して、各種行事等の特別活動が効果的に実施できるよう支援する。	A	B	A	【成果】 ・学校祭では生徒会が中心となり、運営をしたり、学校祭に新しい企画など盛り込んで、大いに盛り上がった。 ・生徒会と連携し、朝の挨拶運動を行った。以前より少し挨拶ができるようになった。 ・教職員で協力・連携して生徒指導に取り組むことができた。 ・悪天候の関係で中止もあったが、計画通り交通安全指導を実施できた。 【課題】 ・ボランティアの参加人数が目標に達することができなかった。もっと参加を促す工夫等していく必要がある。 ・挨拶についてはもっとできると思うので、継続していくと同時に新しい取り組みを考えていく。 ・部活動加入率がほんの少し目標値に届かなかった。継続して加入促進の取り組みをしていく。
		積極的なボランティア活動への参加	多くの生徒がボランティア活動に積極的に参加できる機会と環境を整える。ボランティア参加人数延べ500人。	B			
	規範意識	生活規律の確立	挨拶を大切にし、生徒会役員を中心に挨拶運動を広げ、心のこもった挨拶・適切な言葉遣いができるように指導する。	A	A		
			生徒指導部を中心とした全教職員の指導により、校則・マナーを遵守させ、生徒の規範意識を高める。	A			
	安心・安全	安心・安全な学校づくり	部活動員で構成された自転車安全推進員による街頭での交通安全指導を実施する。年間10回以上実施。	A	A		
	主体的活動	部活動の活性化	新入生歓迎行事での部活動紹介等を活用して部活動の一層の活性化を図るとともに、学習との両立を目指す。部活動加入率95%以上。	B	B		
進路指導部	希望進路の実現	教育相談的機能の強化	進路検討会を中心として、個に応じた指導の手立てを図り、丁寧なケアに努め、教育相談的機能を高める。	A	A	A	【成果】 ・第３学年部と進路検討会を実施し、各生徒の実態に応じて適切な支援の手立てについて共通認識を図れた。 ・大学教員や社会人など学校外の優れた人材を有効に活用し、分野別ガイダンス、模擬授業、学校説明会などを実施することで、生徒の進路探究活動を促すことができた。 ・職員会議などでの模試分析の機会を通じて、学力実態の把握や今後の指導方針の共有に努めた。 ・就職、公務員希望者に対して外部講師を活用しながら、対策講座を計画的に実施し、内定後も外部講師による指導を行った。 ・本校ホームページに進路指導に係る記事を随時掲載できた。 【課題】 ・校内の全教職員で協力して推薦入試対策指導を行っているが、推薦入試希望者が増加傾向にあることをふまえ、校外の人的資材やICTツールの活用を充実させる必要がある。 ・各種研修について、系統的に立案することができなかった。
		各種進路ガイダンスやの充実	各種ガイダンスを強化することを通じて、生徒の内発的動機づけを促し、自尊感情や自己肯定感の向上に繋げる。	A			
		面接・小論文対策指導の充実	校内外の人的資材を有効に活用し、丁寧な推薦入試対策指導を通して、国公立大学推薦入試合格率６割以上を目指す。	B			
		「社会人としての自覚」の醸成	就職希望者への丁寧な職業紹介を行うとともに、労働法規に係る学習、社会人マナー実習などの内定後指導を実施し、内定率100%を目指す。	A			
	指導力向上	指導方法・指導体制の最適化	高大接続改革のなかで変化していく指導方法をセミナーや研修等によって探究し、生徒に速やかに還元できる体制の樹立を図る。	B	B		
	信頼される学校づくり	各種情報の適切な発信	ホームページの進路関係の内容を年間15回以上更新することを目標にし、保護者・地域のニーズを意識した情報発信を行う。	A	A		
保健部	心身の健康管理	配慮を要する生徒や心身の健康問題を早期発見及び対応できるような支援体制作り	気になる生徒について学年部や教科担当者と連携し共通理解を図る。特にケース会議を昨年度より適時、迅速に行うことにより、初期対応に遅れが生じないようにする。	A	A	A	【成果】 ・教育相談会議を通してスクールカウンセラー・SSWとの共通理解のもとで、合理的な配慮を学年部および教務部・教科担当などと連携して行った。また、保健部として発達障害・愛着障害・摂食障害などの研修には積極的に参加した。 ・熱中症対策を、Teamsやほけんだより、部長講話などで徹底して行ったので、深刻な熱中症事例はなかった。また、教職員対象救急救命講習を４つの事例に応じた実践訓練形式で実施し、緊張感をもって必要事項を確認することができた。参加者は46名であった。 ・保健委員会では、ブルーシードプロジェクトというSDGｓに関わる取組を継続して行い、保健委員長が代表として取組業者のSeedに回収したコンタクトレンズを提供した。 【課題】 ・生徒の様々な事例に対して、初期対応をいかに迅速に行うかが課題である。 ・緊急時の対応に関して、本校での事例を通して重要事項を再確認しておく必要がある。
			スクールカウンセラーや専門機関との連携を図り、支援の方向性において100%の共通理解のもと支援を行う。	A			
			要配慮生徒に関わる教職員間の情報共有100%を目指す。	A			
		熱中症対策	教職員や生徒への啓発・広報を通じて、予防に努め、深刻なの熱中症事例0件を目指す。	A			
		教職員研修等	救急救命講習・特別支援・に関する研修を年1回以上実施し、参加率100%を目指す。	B			
	安心・安全な学校生活	清掃・美化活動の充実・安全管理	校内美化に対する意識を高め、快適な学習環境作りに努める。また、保健衛生面から安全管理を行う。	B	B		

評価領域		項目（重点目標）	具体的方策	評価			成果と課題
特色推進部	地域に開かれた学校づくり	広報活動の充実	理数探究科及び普通科の教育内容等の情報や魅力、本校の特徴的な取組等を中学生・保護者・中学教員向けに効果的に提供し、両学科ともに倍率1.0を越えるために高校説明会や学校公開等の機会を活用する。	A	A	A	【成果】 ・合同説明会のパワーポイント資料や学校紹介動画、西高だよりを通じて、本校の魅力を伝えることができた。 ・中学生対象の進路希望調査(11月)では、両学科とも倍率1.0を超えている。 ・「はばたき」(総合的な探究の時間)を、市役所や地域の方、京都府立大学と連携しながら展開することができた。 ・今年度の芸術鑑賞も生徒から高評価を得られ、文化祭に向けた活動と連動させることができた。 ・図書委員活動では、新たに他校生とオンラインでの交流を実施することができた。 【課題】 ・ホームページの更新数は217回(2月10日段階)である。より多くの先生方に関わっていただくことで、何気ない日常の風景や授業の様子などを発信していくことも大切である。 ・探究活動をより良いものにしていくため、３年間を見通した指導の在り方や問いの立て方、分野・テーマの設定など考えていくことが必要である。また、教員間での情報交換や連絡を密にするとともに、教員研修等を通じて指導力の向上を図る。 ・図書館にある本を１冊も借りていない生徒の割合は、３年生で33%であった。
			学校生活における生徒の活き活きとした姿や活躍、学校教育の成果を迅速に伝えるために年300回以上のホームページ更新や年６回以上の広報紙等発行を行う。また、地域の新聞社など情報機関と連携した広報を行っていく。	A			
	新たな価値観を見いだし、未来を展望する力を育む	図書館活動の充実	図書館にある本を１冊も借りていない生徒の割合が卒業時に20%を下回るようにするため、図書委員会活動や各教科との連携等を通じて生徒に図書館の利用を促し、読書活動や探究活動を支援する。その際には、電子書籍も含めて活用する。また、芸術鑑賞会など、生徒の心を豊かにする活動を展開する。	B	B		
		「総合的な探究の時間」の企画・立案	学年部と協力して普通科の「総合的な探究の時間」の企画・立案を行い、多様な学習活動の実践や地域との連携により「主体的・対話的で深い学び」を実現する。また、学びの共有や深化を図るため、中間発表・最終発表を各学年で実施する。	B			
スマートスクール推進部	スマートに学べるICT環境	ICTの有効利用による授業を通した学力と学習効率の向上	教員を対象としたICT活用の事例紹介・提案を20回以上行うことで、学びのICT化を通して学習効率を向上させ、知識・技能だけではなく、学びに向かう力や思考力・判断力・表現力を身に付ける学習や評価が行えるよう支援する。	B		A	【成果】 ・部活動登録、授業評価アンケート返却、生徒からのコメントの個別フィードバックなどのDX化に貢献することができた。 ・ICTを活用した授業の支援や機器トラブルへの対応を行うことができた。また、各教科との連携を取りながら授業支援や事例共有を行うことができた。 【課題】 ・端末およびMicrosoftアカウントのパスワード忘れによるリセット対応は25件であった（２月３日時点）。今後適切な情報管理を呼びかけていきたい。
	端末の正しい利活用	生徒が安心してICTを使用し、効果的に活用できる環境づくり	端末トラブル、パスワード忘れを防止する呼びかけを各学期に２回以上行うことで、１年生の学習用端末の導入および２、３年生の端末活用の年次進行に伴う学び方の改善に向けた支援を行うと同時に、端末や情報の管理意識や情報モラルの啓発にも努める。	A			
	教育DXの促進による	グループウエア等の利活用推進による業務効率の改善	校務のデジタル化支援を10件以上担うことにより、校内ネットワークおよびグループウエアの利用促進を通した教育DXの推進を図ることで、業務効率の改善や円滑な情報伝達ができるよう努める。	A			
理数探究科	先進的な理数教育	探究活動、科学体験活動の充実と指導力の向上	教科会議等で探究活動の事例の交流を10回以上行うことで、探究的な学習を伴う授業事例を教員間で共有する機会を設ける。また、スーパーサイエンスネットワーク(SSN)京都事業をはじめとした他校連携も視野に入れ、生徒間での学びが創発される活動や教員による評価方法の研究を行う。	B	B	B	【成果】 ・連携機関の見直しにより新たな連携先の獲得が可能となった。 ・課題研究について、大学との連携、DXハイスクール事業の活用などにより生徒の興味に応じたテーマ設定とレベルの高い研究活動となるようサポートすることができた。 ・発表を通じた言語活動について、夏期実習発表会、海の京都サイエンスガーデン、西高サイエンス・デイをはじめとした様々な発表の場を設けることで、多様な他者に対する発表を行うことができた。 【課題】 ・課題研究や各行事の運営や指導について、教職員間の目線合わせや内容の共有をより広く、円滑に行うことができるよう工夫したい。 ・科学コンテストなど、様々な案内を発信をすることができた。科学の甲子園（８名）、生物分類技能検定（１名）、水産学会での発表（３名）等に挑戦した。より多くの生徒が主体的に取り組めるよう促していきたい。
		学校外の発表会参加や発信活動の推進	校外での発表や発信活動を通して、体験・研究活動を異分野の他者に伝える機会を10回以上設けることで、生徒による活動の省察や研究の発展を促すと同時に、各種科学コンテストの情報を効果的に発信し、自主的に科学を学ぶ生徒を育成する。	A			
	希望進路の実現	高大連携の推進	京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都大学フィールド科学教育研究センターとの協力体制を深め、延べ10回以上の高大連携を行いながら、実施方法や評価方法の工夫を重ねる。	B	B		
		受験指導力の向上	分掌間・教科間連携により、学校全体で取り組む授業力・教科指導力の向上に様々な形で貢献する。	B			
人権教育	人権学習	多様性と調和性を大切にする人権尊重の態度を育み、さまざまな人権問題について正しい認識と問題解決のための行動力を培う。	学年部や各分掌と連携し系統的・計画的に人権学習を推進する。	B	B	B	【成果】 ・今年度は、第２学年人権講演会に新たな講師をお招きするなど、生徒の実情に合わせた講演会を実施することができた。 ・今年度で50年目の節目の年を迎えた中舞鶴保幼小中高連絡会では、他校種の発表会等に出席するなど、中舞鶴地域の方と交流する機会を得ることができた。また、提言コンテストでは７名の教職員をお招きした。 ・府人研では、中丹ブロック常任委員として他校教員と意見交流を重ね、会議・研修会を通じて各校の取組や人権課題について学ぶことができた。また、府人研・府人教主催の研究発表会等に参加し、各地域や各種学校での取組について理解を深めた。 【課題】 対生徒への人権についての活動が講演会のみとなっているので、担任の協力を得てLHRで人権について考える機会を増やすことができればと考える。 また、府人研主催の研究会等の参加が人権担当のみとなっているので、初任者等を含む教員に呼びかけ、参加を促していきたい。
			時代のニーズに応じた学習教材・内容を研究・検討し、手法の工夫・改善に取り組む。	B			
			講演会とは別にLHRを活用した人権学習の時間を各学年、年に最低１回はおこない、人権意識の高揚を目指す。	B			
			人権課題の解決の主体としての行動力・実践力を育てる学習を展開する。	B			
	連携	教育活動を充実させ、生徒の学校生活に対する満足度を高める。	学年部・生徒指導部・保健部等と連携し、いじめの防止や困難な条件を持つ生徒の把握・援助に努め、進路保障を図る。	B	B		
			中舞鶴保幼小中高連絡会等との地域連携を一層深め、就修学の保障に努める。	B			
	研修・研究	全ての教育活動を通じて人権教育に取り組む観点から、人権感覚を日常的に育む。	全教職員が人権教育に対する認識を深め、人権意識の高揚を図る。	C	B		
			研修会等に積極的に参加し、様々な人権課題に対する実践的考察や手法等を身につける。	B			
			人権教育全体計画に従って、各教科の授業や取組において人権の視点を踏まえた指導を考察し、展開する。	B			

評価領域		項目（重点目標）	具体的方策	評価			成果と課題
第１学年部	学習指導	学習習慣の定着と学力の向上	授業にしっかりと臨ませると共に、1日2時間以上の家庭学習時間を確保させ、学習習慣の定着と学力の向上を図る。	B	B	B	【成果】 ・バス遠足・学校祭(文化祭・体育祭)・学年レクなどを仲間との繋がりやクラスの結束が見られ学年間の良い関係が築くことができた。 ・各種取組において落ち着いた雰囲気の中で進められた。諸規則について概ね守らせることができた。「西高生」としての自覚を持ち生活を送らせることができた。 ・個別面談やＨＲでクラス全体に、進路情報の提供や進路指導・学習指導を行った。 【課題】 ・家庭学習の確保、学習習慣の定着は、学年全体では十分とは言えないが、頑張りや成果のみられる生徒も多かった。成績不振者や欠席過多の生徒については、継続的に個別指導を重ねてきた。 ・進路に悩む生徒に対し、素早く丁寧に対応し生徒や保護者と話し合い、最終的に本人の意志・保護者の考えを尊重する対応を行った。
		進路実現に向けての取組を充実	進路希望の把握に努め、個に応じた適切な指導・支援を行う。また、進路情報の提供を積極的に行い進路実現につなげる。	B			
	生徒指導	基本的な生活習慣の確立と人権意識の育成	「西高生」として自覚を持ち、明るい挨拶の励行、諸規則の遵守(特別指導0)、集団としての連帯感のある取組をさせる。	A	A		
			集団の一人として意識させ、他者を尊重する態度、人権意識を育てる。	A			
		積極的な学校行事や課外活動への取組	積極的に行事や活動に取り組み活力のある集団を形成することで、個々の生徒の成長に繋げる。(生徒の満足度90%)	B			
	保護者との連携	保護者との連携	家庭・保護者等と連携を密にし、生徒の情報共有を行い生徒の成長と健全な生活を送れるよう努める。アンケートによる保護者の満足度を90%を目指す。	B	B		
第２学年部	学習指導	基礎学力の充実を図る。	教科担当者と連携を密にし、授業で基礎的な学力をしっかり身につけさせる。また、家庭で学習する習慣の定着率70%を目指す。	B	B	B	【成果】 ・進研模試（全員模試）において偏差値50以上の生徒人数を増やすことができた。 ・研修旅行は大きなトラブルもなく、無事終了することができた。事後アンケートでの生徒の満足度は９割を超え、思い出に残る良い旅行となった。 ・学年だよりを複数回発行し、保護者に学校での様子について情報発信ができた。 【課題】 ・校則の遵守ができていない生徒に対する指導が徹底しきれなかった。 ・成績不振を抱える生徒が多く出た。家庭学習習慣の確立がまだまだ不十分な状況である。 ・SNS等の利用に関するトラブルで、生徒指導にかかる案件がいくつかあった。
		進路実現に向けての取組を充実させる。	面談等を通して個に応じた進路選択のサポートを行っていく。進路情報の提供や模試の案内・分析を積極的に行い、偏差値50以上の生徒数を増やす。	B			
	生徒指導	基本的な生活習慣を確立させる。	校則や交通マナーなどの生活規範を遵守する態度を身につけさせる。また、50%以上の生徒が生徒のほうから積極的に挨拶ができるようにしていく。	B	B		
			ICT機器等の使用について、情報モラルの遵守を徹底し、トラブル件数０件を目指す。	C			
		課外活動や行事の取組を充実させる。	部活動や課外活動、学校祭や研修旅行等の行事に力を合わせ取り組めるように支援を行い、生徒の満足度80%以上を目指す。	A			
	保護者・分掌との連携	保護者や分掌との継続的な連携を図る。	家庭での様子や、学校での状況についてこまめに情報交流を行い、生徒の健全な成長を助長できるよう努める。また、分掌との連携を密にし、効率よい学年運営ができるようにしていく。(交流・連携の頻度90%以上を目指す。)	B	B		
第３学年部	進路指導	希望進路の実現	何度も面談を行うとともに、教科間、分掌間の連携を深め、国公立大学の合格者数を70名以上にする。	C	C	B	【成果】 ・体育祭と文化祭において、生徒部主催の学校祭アンケートで「楽しかった」の項目が95%以上であった。３年生としてリーダーシップを発揮できた。 ・学年集会で校歌の歌唱指導を行うなど、生徒が元気よく校歌を歌うことができるように取り組んだ。今後も様々な取組を行いたい。 【課題】 ・国公立大学の合格者数は56名であった。指導内容を総括し、次年度に繋げたい。 ・北部地域に進学、就職する生徒は15名であった。大学や専門学校、就職等の情報を引き続き伝えていきたい。
			京都府北部地域に進学、就職する生徒を20名以上にする。	C			
	生徒指導	人間力の向上	学校生活のあらゆる場面でリーダーシップを発揮できるように支援し、学校祭アンケートで満足度90%以上にする。	A	B		
			積極的に挨拶を行ったり、元気よく校歌を歌ったりできるように様々な取組を行い、年度末のアンケートで意識の変わった生徒が90%以上になるようにする。	B			
	保護者連携	良好な信頼関係の構築	丁寧な連携を図り、年度末の保護者アンケートで80%以上にする。	B			
事務部	教育環境の整備	生徒及び教職員が安全・安心な学校生活が送れるような教育環境を確保する	校舎・施設等の適正な維持管理に努める。また、月に１回程度事務部で施設点検を実施する。さらに他の教職員とも情報共有し、危険箇所の早期発見及び早期対処、修繕計画の作成を行う。	B	B	B	【成果】 ・学校の特色化を進めるための予算については、可能な限り確保に努めた。 ・広報活動は重要であり、「学校案内」「西高だより」等広報紙の印刷製本費の確保及び中学校等への配布に伴う出張旅費の確保を優先的に行うことができた。 ・生徒への援護制度（修・就学支援金、学習端末購入費補助金、日本学生支援機構等）については、学年団の協力もあり、概ね申請書を提出期限内に提出することができた。 【課題】 ・月１回の施設点検が実施できていない。校舎・施設等の維持管理を教職員と共有し、特に危険個所については、早期対応に努めていきたい。また、衛生委員会の職場アンケートの意見も参考にしている。 ・会計事務研修を積極的に受講した。しかし、チェック体制が不十分な部分もあり、研修内容を活かし、適切な事務の執行を行う。
		学校の特色化を進める設備・備品の充実	探究活動や理数教育等特色ある教育活動を進めるため、各分掌と連携をとりながら効果的な予算執行に努める。	A			
	選ばれる学校づくり	広報活動の充実	広報活動を充実させるための予算の確保する。	A			
	修・就学支援	生徒の修・就学支援の充実	保護者・生徒に対する十分な案内周知と丁寧な対応を行い、就学支援金や各種奨学金事務を円滑に実施する。	A			
	会計管理	適切な会計事務の執行	会計事務研修に参加するなどし会計事務に関する知識を深め、給与、旅費及び会計事務等の適正な処理に努める。事務遅延が生じないよう主担当・副担当を中心に職員相互の進捗状況のチェックを行う。	B			
学校関係者評価委員会による評価		生徒が生き生きと活動していることはよくわかるが、さらに地域や中学生にアピールする必要がある。学校案内などに将来を見通せるメッセージ等を記載するなど、学校理解を深めるためのさらなる広報活動のあり方の検討をすすめる。地域の企業からもキャリア教育がしっかりできており、育てて送りだしている様子がわかる。挨拶の重要性など中学校との連携の中で進めていく。主体的な学びを推進するために図書館の利用促進も進める。SNSだけに頼らない「自分探し」の方法や、「自分は何者なのか」を考えさせるアプローチをすすめていく。				
次年度に向けた改善の方向性		卒業生の活躍を含め広報活動をさらに充実させる。探究活動や地域での活動をさらに推進し、生徒が自分について見つめなおし将来を見通せる力を育成する。					

評価　Ａ：十分達成できている（目標以上の成果が得られた）　Ｂ：ほぼ達成できている（ほぼ目標通りの成果が得られた）　Ｃ：達成できているとはいえない（成果はあったが、目標に達していない）　Ｄ：ほとんど達成できていない（ほとんど成果がなかった）